練馬区立南町小学校

南町小だより

令和４年１１月３０日
校 長　星 美 登 里

つよく　　かしこく　　あたたかく
～　ありがとうを　とどけます　～

今年もたくさんのみかんを収穫しました

心を一つに
～はじめての音楽会～

校　長　　星　美登里

１１月１８日（金）・１９日（土）に、音楽会を実施しました。これまで本校では、文化的学校行事として２年のサイクルで学芸会と展覧会を行ってきました。今年度は開校７０周年記念行事もある中で、子どもたちに皆で音楽を奏でる楽しさも味わってほしいと考え、音楽会を開催いたしました。初めての開催にあたり、皆様のご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。子どもたちが仲間と紡ぎ出す「時の芸術」をお楽しみいただけましたでしょうか。

音楽科はコロナ感染予防による教育活動の制限を特に受けてきた教科の一つです。子どもたちの歌声も鍵盤ハーモニカやリコーダーなどの管楽器も積み上げがない中での音楽会の開催でした。

現在、歌唱はマスク着用のまま行っています。音楽会前の練習で、３学年ずつの全校合唱「さあ・はじめよう」を体育館で初めて聴いたときの歌声がまだ耳に残っています。「『さあ』の歌詞を大きな声で元気よく歌いましょう。」と音楽専科が促すのですが、マスクを着用しているとはいえ、これが３学年分の声なのかと思うくらい小さな歌声だったのです。思い返すと、３年生以下の子どもたちは音楽朝会など、全校児童で歌う経験がありません。みんなで歌う経験が乏しいのだとつくづく感じました。この状況は、３年ぶりの夏の水泳学習で子どもたちの泳力が落ちていたのと同じです。今の子どもたちの現状を踏まえて、無理を求めずに、子どもたちの音楽への意欲をもたせながら、力を高めてきた成果を披露できれば十分と、教員たちには話していました。

体育館での器楽合奏の練習が始まったときも、予想はしていましたが軽い衝撃を受けました。どの学年でも、子どもたちの音が全くそろわず、それぞれがバラバラに演奏していて曲を通すことができなかったのです。一人での独奏はできても仲間との合奏にはなっていませんでした。「音楽」は、音の長さ、高さ、大きさ、音色の違いで成り立つ「音」の連続です。仲間と音楽を創るとき、お互いの「音」をよく聴き合うことで、豊かな響きが生まれるのです。練習を重ねるにつれ、音楽の響きがどんどん変わっていきました。その変化は私の予想をはるかに超えていました。子どもたちは、自分たちの上達を実感し始め、心を一つにしてより豊かな響きを求めるようになっていきました。「心を一つに」は、代表委員会で話し合った音楽会のめあての最初の言葉です。仲間と心を一つにしたことで、一人一人がもつよさや可能性がこんなにも引き出されるものなのかと、子どもたちのもつ力に感動の日々でした。前日のリハーサルでは、ペア学年の演奏を聴き合い、お互いに明日の本番への刺激をもらいました。

音楽会当日。１日目の児童鑑賞日は、奇数学年・偶数学年に分かれ鑑賞し合いました。残念ながら２学年分の演奏はビデオ視聴となりましたが、演奏も鑑賞も楽しんでいる様子が見られました。２日目の保護者鑑賞日では、ご来場の皆様に今までで一番の演奏を披露した後、晴れ晴れとした顔で退場していました。

音楽会が終わった土曜日、私は校庭に出て、下校する子どもたちを見送っていました。一人の男の子が「さようなら」と言って私の前を通り過ぎた後、不意に立ち止まり、向きを変え私に近づいてきました。わざわざ戻ってきた子どもの笑顔と一言が、私への嬉しい贈り物となりました。「音楽会、楽しかった！」